

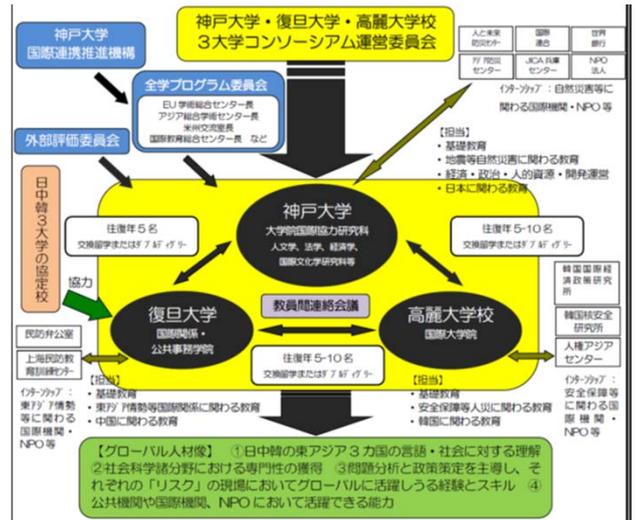
大学の世界展開力強化事業(平成28年度採択) 神戸大学 取組概要

【事業の名称】(選定年度28年度・(タイプA-① CAMPUS Asia))

東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム

【事業の概要】

2011年の東日本大震災および福島第一原子力発電所の事故は、その救援・復旧・復興活動には大きな困難が伴い、自然災害やそれに伴う出来事が国境を越えて通貨危機や安全保障問題にも影響を及ぼすことを如実に示した。さらに2016年に発生した熊本地震は、そうした問題が依然として現在の問題であることを示している。東アジアにはさらに、北朝鮮の核実験など原子力発電所問題にとどまらない核問題、また歴史認識問題など日中韓関係における外交問題など、リスクを伴う懸案事項が山積している。本プログラムは、こうした諸問題に「リスク」という観点から取り組み、社会科学的問題分析能力と実践的な応用力を身につけた専門家の養成を目指すものである。日本・中国・韓国の東アジア3カ国が国際的な協力体制を整えることは、東アジアのみならず世界においても大きな意味を持っている。本プログラムでは、神戸大学大学院国際協力研究科、復旦大学国際関係・公共事務学院、高麗大学校国際大学院がコンソーシアムを構成し、3大学が有する世界レベルの大学院教育を通して「東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家」を養成する。



【交流プログラムの概要】

本プログラムを実施する神戸大学国際協力研究科および復旦大学国際関係・公共事務学院、高麗大学校国際大学院では、それぞれ英語コースまたは、英語プログラムが開設されているため、英語が本交流プログラムの共通言語である。また、国際的なリスクについて及び、リスクに対する実務的な対処について学べる専門性の高い科目を選択することが可能である。博士前期課程の大学院生を対象に、ダブルディグリープログラム(12か月)または交換留学(6か月/12か月)から選択できる柔軟性の高い交流プログラムである。平成28年度以降、既存の交流プログラム概要に加えて、新たに以下の3つの取り組みを行った:

- (1) ダブルディグリー／交換留学プログラムでは、一人の学生が2大学でそれぞれ一学期ずつ交換留学を行なう枠組み(「日中韓トライアングル交換留学」)を制度化した。
- (2) 平成29年度からは学生の派遣・受入を博士後期課程に拡大し、東アジアのリスク・マネジメントに関係する研究を行なう学生を対象に半年間の交換留学を毎年1-2名程度実施し、研究を支援する体制を構築した。これによって博士後期課程の学生が日中韓にて現地調査を行うことも可能になった。
- (3) 従来から実施されてきたインターンシップやフィールドトリップを、コンソーシアム内で発展的に制度化し、単位化する体制を整えた。



東北フィールドトリップ(大槌町)

【本事業で養成する人材像】

世界に存在する国家間にまたがる諸問題を「リスク」という観点から分析し、最適な対応策を提示する(マネジメント)ための専門的な知識とスキルを持った人材を幅広く養成することを目的としている。具体的には、①自然災害時のみならず経済危機、社会情勢危機時におけるリスク・マネジメントに関わる応用力のある専門的な知識とスキルを持った人材、②3カ国が拠点となり日本・中国・韓国に関する政治・経済・人的資源開発・開発運営を含む社会科学全般の専門性を兼ね揃えた人材、③自国語に加えて英語と現地語による政策・実施支援ができるレベルのコミュニケーションスキルを習得することができる人材、④異文化を理解した上で、公共機関や国際機関、NPOにおいて世界の危機時における問題の分析、政策策定を主導し、さらに災害の現場で活躍できる専門家こそ本プログラムが目指す人材像である。

【本事業の特徴】

- **英語での教育研究経験が豊富な教員による留学サポート:** 神戸大学国際協力研究科、復旦大学国際関係・公共事務学院、高麗大学校国際大学院のコンソーシアムを構成する教員はほぼ全員が海外での豊富な英語もしくは現地語による教育研究経験を有しており、これら3大学院はこれまでも世界各地から多くの留学生を受け入れた実績があり、留学生に対する十分な経験とサポート体制が構築されている
- **履修や研究への包括的なサポート:** 神戸大学での受入れ学生については、各講義にティーチング・アシスタント(TA)が任命され、また各学生にチューターが付き、各留学生の研究関心に応じた助言を行い研究生活がスムーズに進むよう、履修支援や学業全般に対する支援をしている。



地震体験 野島断層フィールドトリップ(淡路島)

ダブルディグリー学生の学位論文執筆に際しては、教育研究補佐員が書き方や内容について助言し、自主ゼミナールをアレンジして助言指導を行っている。これによって1年という限られた時間での学位取得が可能となるよう効率的な論文執筆を 【交流予定人数】
後押しする体制が整っている。 <タイプA-①>

- **インターンシップ・就職支援・産業界との連携:** 国内外の専門家、研究者を招へいして「リスクマネジメントセミナー」を開催している。招聘講師は主に世界銀行、アジア開発銀行など、国際機関で活躍している本研究科修士が努めている。実務者からの専門的な講義を通じて、将来の東アジア、また、世界レベルで活躍するリスクマネジメント専門家になるために必要な世界基準の教育を行っている。国際機関で就職を希望している学生に対してはインターンシップ先の紹介を行うとともに、英文履歴書の書き方、インターンシップ先で求められるスキルの事前研修を行っている。

	H28	H29	H30	H31	H32
日本(J)での受入	C5 K3	C5 K5	C5 K5	C5 K5	C5 K5
中国(C)での受入	J2 K5	J5 K2	J5 K5	J6 K5	J6 K5
韓国(K)での受入	J9 C4	J11 C2	J11 C5	J12 C5	J12 C5

1. 取組内容の進捗状況(平成28年度)

【神戸大学】

【事業の名称】 東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム(選定年度28年度・(タイプA-①) CAMPUS Asia)

■ 交流プログラムの実施状況

過去5年間のパイロットプログラムの成功実績を踏まえ、平成28年度からは神戸大学国際連携推進機構の下に全学プログラム委員会を立ち上げ、国際連携推進機構との連携強化のため兼任教員を配置し、大学本部としての実施体制になった。また、従来の3大学実務者会議を教員連絡会へ再編した。以下は平成28年度に実施した活動の一覧である。

- **災害スタディツアーの実施:**2016年11月神戸市長田区の被災地訪問スタディツアー、2017年2月「東北地方の被災地訪問-岩手県盛岡市・大槌町を中心に」スタディツアー、2017年2月「野島断層記念館・南あわじ津波防災センター訪問」。
- **国際シンポジウムを開催:**2017年2月に3大学共同国際シンポジウムを開催し、3大学の教員によるパイロットプログラムの実績を報告、学生による研究成果発表を行い、本事業を学内外に情報発信しコンソーシアムの内容強化について意見交換が行われた。
- **第一回教員連絡会議の開催:**3大学の教員と事務担当者が一同に会して行っていた従来の会議を「教員連絡会議」に改編したことでダブルディグリー学生と博士後期課程学生の共同指導に向けた話し合いの機会を確保し、年に2-3回開催する体制が整った。
- **インターンシップ先の開拓:**学生から強いニーズがある就業体験/インターンシップの新規開拓を行うため、ソウルとワシントンDCにある国際機関を訪問、キャンパスアジア生の受入れに積極的な機関と早ければ2017年夏に留学生を派遣することの道筋をつけ、単位認定などの制度化に向けての準備を行っている。

<タイプA-①>

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成28年度春学期には復旦大学へダブルディグリー学生を2名、高麗大学へは3名を派遣した。秋学期には高麗大学へ1名を派遣した。また、8月と2月に高麗大学で開催されている短期韓国語研修プログラムへは合計5名を派遣した。

○ 外国人留学生の受入

復旦大学と高麗大学からダブルディグリー学生/交換留学生を計7名受入れた。復旦大学からはダブルディグリー学生を3名、交換留学生を3名受入れた。高麗大学からはダブルディグリー学生を1名受入れた。

	H28
日本(J)での受入	C6 K2
中国(C)での受入	J2 K5
韓国(K)での受入	J7 C4

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- 3大学院間では各大学の履修コースのカリキュラムの水準、単位の認定基準、成績基準等を協議し、その質の同等性を確保している。各大学が自国の基準によって評価・認定を行い、最終的にプログラム運営委員会におけるコース修了判定を経て、修了証を交付している。
- 国内外の外部評価委員、理事、副学長をはじめ、国際連携推進機構やその他の関係部局から構成される外部評価委員会を各年度末に実施し、その結果はコンソーシアム委員会および実務者会議にてプログラムの成果チェックを行っている。
- 交換留学制度による取得単位については、各大学の規則に定められた基準に基づいている。また、単位算定方式についてはシラバスを参照しながらその内容を確認し、単位あたりの授業時間を計算の上で、すべて1:1で互換している。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- キャンパスアジア室による学生支援:中・韓の各国での教育研究経験を有する専属スタッフが常駐する「キャンパスアジア室」を設置し、研究上、生活上の両面からのサポートを多言語対応できめ細かく行っている。
- 事前教育カリキュラムの整備:派遣・受入学生のため、語学研修、研究計画作成支援等の事前教育プログラムを実施し、各学生から学習ニーズの聞き取りを実施し、カリキュラムに反映させるシステムを整備している。
- インターンシップやフィールドワークの推進:受入・派遣後を見据えたキャリアデザイン支援、受入・派遣生の国際機関へのインターンシップ先の開拓、博士後期課程によるフィールドワークの推進を行うことで、修了後のキャリアに貢献できるような学生支援を行っている。
- プログラム拡大への環境整備:本プログラムを博士後期課程へも拡大し、日中韓トライアングル交換留学の実施、教員連絡会議の定期的な開催をしている。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

- 教育内容の可視化・ホームページの多言語化:パンフレット、ニュースレターを作成し、広報及び成果公表の基盤としてホームページを日英中韓の4言語対応にしている。また、Facebookも立ち上げ、ホームページとも連動し、SNSを通じた交流の拡大を行っている。また、全学ホームページでの告知も行い、定期的な情報発信に努めている。
- 国際共同シンポジウムを3大学の持ち回りで毎年開催し、学生の教育機会と同時に本プロジェクトの成果報告や情報公開としての重要な機会と位置付け2017年2月に神戸にて開催したシンポジウムは学内外から計約80名が参加した。
- 平成29年度からは修了後のサポート体制と同窓会の整備を通じて、キャンパスアジアの活動を広報するとともに、修了生と在学学生、また新入生間のネットワーク形成を構築する。

■ グッドプラクティス等

- 派遣・受入学生ともにインターンシップ先を紹介し、修了後の就職活動に対する助言指導を行うことによって、神戸大学の学生はその語学力や留学経験が高く評価され、UNESCOバンコク、KOICAなどの援助機関やコンサルティング会社など国際的なリスクマネジメントにかかわる民間企業への就職を多数果たした。
- 3大学共同国際シンポジウムを開催することで学生の研究発表の場を与え、3大学の教員からフィードバックをもらうことにより研究意欲を高めることができた。また、進学する学生にとっては模擬学会発表の場を与えることができた。



日中韓3大学共同国際シンポジウム(日本・神戸)

2. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

【神戸大学】

【事業の名称】東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム(選定年度28年度・(タイプA-① CAMPUS Asia))

■ 交流プログラムの実施状況

過去5年間のパイロットプログラムの成功実績を踏まえ、平成28年度からは神戸大学国際連携推進機構の下に全学プログラム委員会を立ち上げ、国際連携推進機構との連携強化のため兼任教員を配置し、大学本部としての実施体制となった。また、従来の3大学実務者会議を教員連絡会へ再編した。以下は平成29年度に実施した活動の一覧である。

- **被災地研修の実施**: 2017年12月神戸市中央区において被災地スタディツアーを実施した。また、2018年2月には、宮城県仙台市および亘理町を訪問し、東日本大震災被災地研修を実施した。
- **国際シンポジウムの開催**: 2017年11月に3大学共同国際シンポジウムを開催し、3大学の教員による東アジアにおけるリスク・マネジメントの展望報告、学生による研究成果発表を行い、本事業を学内外に情報発信した。また、3大学教員連絡会を併せて開催し、コンソーシアムの連携強化について意見交換が行われた。
- **短期プログラムの活性化**: 2017年12月に高麗大学校から2名・復旦大学から1名を神戸大学に招聘して、冬期短期研修を実施した。また、高麗大学校で開催された夏期短期研修には17名、冬期短期研修には神戸大学より11名を派遣した。
- **インターンシップ派遣**: 前年度に実施したインターンシップの新規開拓の結果、韓国・ソウルのイクレイ東アジア事務局に2名、韓国・仁川のUNESCAP北東アジア事務所1名、米国・ワシントンDCの世界銀行本部に2名をインターンとして派遣した。

<タイプA-①>

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 日本人学生の派遣

平成29年前期(9月)に高麗大学校へダブルディグリー生1名、交換留学生2名を、後期(3月)に高麗大学校へダブルディグリー生2名を派遣した。高麗大学校短期研修(8月、2月)には計28名、復旦大学実施の学術大会(7月)に3名を派遣した。

○ 外国人留学生の受入

復旦大学からはダブルディグリー生2名、交換留学生4名、高麗大学校からはダブルディグリー生1名の計7名を受け入れた。また、神戸大学で実施した冬期(12月)には高麗大学校より2名、復旦大学より1名を受け入れた。

	H28	H29
日本(J)での受入	C 6	C 7
	K 2	K 3
中国(C)での受入	J 2	J 3
	K 5	K 4
韓国(K)での受入	J 7	J 33
	C 4	C 11

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- 3大学院間では各大学の履修コースのカリキュラムの水準、単位の認定基準、成績基準等を協議し、その質の同等性を確保している。各大学が自国の基準によって評価・認定を行い、最終的にプログラム運営委員会におけるプログラム修了判定を経て、修了証を交付している。
- 国内外の外部評価委員、理事、副学長をはじめ、国際連携推進機構やその他の関係部局から構成される外部評価委員会を各年度末に実施し、その結果はコンソーシアム委員会および教員連絡会にてプログラムの成果チェックを行っている。
- 交換留学制度による取得単位については、各大学の規則に定められた基準に基づいている。また、単位算定方式についてはシラバスを参照しながらその内容を確認し、単位あたりの授業時間を計算の上で、すべて1:1で互換している。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

- **キャンパスアジア室による学生支援**: 中・韓の各国での教育研究経験を有する専属スタッフが常駐する「キャンパスアジア室」を設置し、研究および生活上の両面からのサポートを多言語対応できめ細かく行っている。
- **事前教育カリキュラムの整備**: 派遣・受入学生のため、語学研修、研究計画作成支援等のオリエンテーションや、各学生から学習ニーズの聞き取りを実施し、カリキュラムに反映させるシステムを整備している。
- **インターンシップやフィールドワークの推進**: 受入・派遣後を見据えたキャリアデザイン支援、受入・派遣生の国際機関へのインターンシップ派遣、博士後期課程によるフィールドワークの推進を行うことで、修了後のキャリアに資する学生支援を行っている。
- **プログラム拡大への環境整備**: 本プログラムを博士後期課程に拡大したほか、日中韓トライアングル交換留学の実施等、学生のニーズに沿ったプログラム開発を行っている。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

- **教育内容の可視化・ホームページの多言語化**: パンフレット、ニュースレターを作成し、広報及び成果公表の基盤としてホームページを日英中韓の4言語対応にしている。また、Facebookも立ち上げ、ホームページとも連動し、SNSを通じた交流の拡大を行っている。また、全学ホームページでの告知も行い、定期的な情報発信に努めている。
- **同窓会の発足**: 平成29年度からは修了後のサポート体制と同窓会の整備を通じて、キャンパスアジアの活動を広報するとともに、修了生と在学生、また新入生間の情報共有ネットワークを構築した。

■ グッドプラクティス等

- **キャリア形成支援**: 派遣・受入学生ともにインターンシップ先を紹介し、修了後の就職活動に対する助言指導を行っている。その結果、学生の語学力や留学経験が高く評価され、UNESCOレソト事務所、韓国・国立災害安全研究院といった国際的なリスク・マネジメントにかかわる機関・企業への就職を果たした。
- **レクチャーシリーズの実施**: 学生のリスク・マネジメントに対する関心・理解を深めることができるよう、国内外のリスク・マネジメント関連専門家を招聘して定期的にレクチャーを実施している。



日中韓3大学共同国際シンポジウム(中国・上海)